

事にはあらず。教主釈尊の御すゝめか、将又過去宿習の御催か、方々紙上へ（尽し難し）。恐々。

道場神守護事

建治二年（一二七六）十二月十三日。五十五歳。於身延。富木常忍宛。
五紙完 中山法華経寺蔵。（定一二七四頁 原漢文）

鷲目五貫文たしかに送り給ひ候おわんいたぬ。且つ知ろし食めすが如く此の所は里中を離れたる深山なり。衣食乏少の間、読経よみきょうの声こゑ続き難く、談義の勤めつと廃しつべし。此の託宣は十羅刹の御計おんはからにて壇那の功を致さしむるか。止観しかんの第八に云く、「帝釈堂たいしやくどうの小鬼しょうきやう敬かうい避さくるが如し。道場の神かみおおい大なれば、妄みだりに侵しん嬖にようすること無し。又城の主剛こうなれば守る者も強し。城の主おそ恒とこれば守る者も忙おそる。心は是れ身の主なり。同名・同生どうじやうの天是れ能く人を守護す。心固かたければ則ち強し。身の神尚かみなおし爾しかなり。況や道場の神をや」。弘決くけつの第八に云く、「常に人を護ると雖も、必ず心の固かたきによ仮かりて神の守り則ち強し」。又云く、「身の両肩なほの神尚常なほに人を護る。況や道場の神をや」云云。人の所生しじやうの時より二神守護す。所謂いわゆる同生どうじやう天・同名どうみなうてん天なり。是を俱生しやうじん神と云う。花嚴経けげんの文なり。文句もんぐの四に云く、「賊南無仏なむぶつと称なづして尚天頭てんずを得たり。況や賢者称なづせば十方じやうぱふの尊神そんじん敢あて当あたらざらんや。但精進ただしじんせよ、懈怠けだすること勿なれ」等云云。釈の意は、月氏がつしに天を崇めて仏を用いざる国あり。而るに寺を造り第六天の魔王を主とす。頭は金を以てせり。大賊年来之を盗まんとして得ず。有る時あ仏前ぶつぜんに詣もつで物を盗みて法を聴く。仏説ぶつせつきて云く、南無とは驚覺きやうかくの義なり。盗人之を